

古典学習入門期の高校生へ向けた 授業に関する一考察

—「日記文学」のリライトを通して—

宮澤宏枝

1 はじめに

1-1 生徒の実態から

筆者の勤務する学校は農業高校である。農業が盛んな地域にあり、将来的に地元の農業を支えたいという思いから入学を希望する生徒が多い。また、農業高校の特徴として、実習が多いという点がある。そのため、中学校で机に座って勉強することに対して苦痛を感じた生徒が入学を希望することも少なくない。生徒全体の雰囲気としては、勉強は苦手だが、教師に言われたことは「とりあえず頑張ってみる」というような純朴な生徒が多いのが特徴である。

このような現状から、普通科のいわゆる「座学」の授業については、モチベーションを維持することが難しい。国語科の授業では、特に古典の授業において、その傾向が顕著に表れる。進路選択の面からみても、一般的な入試制度を用いて進学する生徒はほとんどなく、受験時に古典の知識が必要となる生徒はいない。日常生活でも古典作品に触れる機会はあまりない。授業で古文教材を扱うことを予告した際の反応からは、生徒にとって古典は「自分たちの知らない言葉」であり、「未知のもの」であることが窺える。

詳細に生徒の意識を知るためアンケート調査を行った。表1はその結果である。

表1. 国語や古典等に関する意識 (数字は人数 / n=152)

	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	あてはまる	とてもあてはまる
1 自分は勉強が得意なほうだ	67	41	35	4	5
2 国語は得意なほうだ	28	49	46	22	7
3 国語は好きだ	17	45	57	26	7
4 古典は身近なものだと思う	85	49	16	2	0
5 古典は楽しいものだと思う	63	55	28	6	0
6 古典は難しいものだと思う	14	8	10	32	88
7 古典を勉強することは意味がないと思う	10	18	69	27	28
8 日常的に日記を書く方だ	127	17	5	1	2
9 SNSなどに日常のことを投稿する方だ	54	33	33	23	9

質問3の結果から、「勉強が得意なほうだ」という質問に対し70%の生徒が「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答しており、勉強に関してコンプレックスをもっていることがわかる。勉強全般ではなく国語という教科に焦点化した質問2では、その割合は少し減り、生徒の中で国語という教科に対する苦手意識はやや少ない。質問4～6からは、古典の難しさを感じている生徒が多いことがわかる。逆に古典の楽しさや身近なものだと感じる感覚をもっている生徒は非常に少ない。しかし、「古典を勉強することは意味がないと思う」という質問7では「どちらともいえない」と答える生徒が増え、なんとなく勉強しなくてはいけないものだというような感覚をもっていることがわかる。

本校の生徒が授業で古典に触れる機会は、2年生までである。高校卒業後の進路状況からも、ほとんどの生徒が人生の中で古典に触れることがないことが予想される。人生最後の古典の授業として、生徒に少しでも「意外と古典の授業も悪くないかも」と思わせたい。このような思いから、本校の生徒にとって必要な古典の授業を模索したいと考えた。

1-2 古典学習入門期の注意点

古典の授業に対するモチベーションが低く知識も乏しい、いわゆる初学者に対して古典の授業を行う際に大切にしなければならないことを整理しておきたい。

井浪真吾は、古典の入門教材として扱われる説話教材に焦点を当てながら古典教育の現状を整理する中で、中等教育における国語教科書から「生徒たちが物語内容を面白く身近に感じるということだけが『親しむ』とされ、古文テキストの『世界解釈、世界像構築』などは読まれない」⁽¹⁾と現状を指摘している。実際に学校でどの教材を扱うかを考える時、話の内容に可笑しみがある、恋愛ものの方が生徒の食いつきが良いなどといった点を考えて教材を選択する現状は少なくない。他にも、一方的に聞いているだけでは飽きてしまうので、何らかの活動を仕組もうとすることもある。井浪は、古典の授業では創作活動に関する実践や提案が多くなされていることに着目し、これらの学習は「生徒たちが古文テキストや古典世界を身近に感じることを第一の目標とされ」、「古文テキストにならった創作活動を通じて、伝統文化を継承する態度を育てながら、これにとどまらないことばの力を身につけていくことが目標として捉えられ」ることから、「古文学学習を通じて、伝統文化を継承しつつ新たな文化創造の契機を生徒たちに与えようとしている」と一定の評価を与えつつも、「これらの創作活動では、短歌や俳句、歌物語という型を模倣するだけで古文テキストに記された価値観や世界観は問題とされません」と述べる⁽²⁾。創作活動は、生徒が古典を身近に感じながら学習していくために多く行われているものの、その中身はその作品の価値観や世界観に迫る部分までは至っていないという指摘である。生徒の興味をひいたり身近に

感じさせようとするための工夫は考えられているものの、あくまで古典世界への入り口の工夫に留まっている。

古典の「世界解釈、世界像構築」に触れさせるとしても、なお大きな問題が残る。それは、「カノン（聖典）」としての「古典」問題である。古田尚行は、「古典テキストは、差別構造を前提とした表現世界といえ」、授業者がこの問題にはできる限り自覚的でなければ、「古典世界の差別構造をそのまま「再生産」していくことにな」と指摘している。その上で、

しかし、同時に大切なことはこの差別構造を否定していったり削除していくのではなく、積極的に用いていき、その物語がそのような差別構造に対してどのように向き合い、対話をしているのか、それが問える場を教室空間に持ち込み、慎重に批評をしていくことです。古典をア・プリオリに「価値あるもの」として受け入れずに、それを批評していくことです。古典を継承することには、現代の読み手である私たちがその価値を更新していく営みとして捉える視点が必要だと思います。

と述べている。さらに、古田は、古典教育の意義について考える中で、

古典テキストの多くが現代のテキストではないからこそ、生徒と古典との隔たりが大きく、それゆえに「他者」を眺めることが「自己」の問題を切り拓いていくことにもつながるのです。そしてまた、そのような「他者」を「翻訳」していく行為は、他者理解ともいえますし、文化の翻訳とも言えます

と述べている。⁽³⁾

勤務校の生徒たちは、古典に対して「なんとなく勉強しなくてはいけないものだ」という感覚をもっていることがアンケートから示唆されたが、このような生徒たちにとっては、古典の授業は、無条件に「古典は大切なものだ」という価値を植え付けていくことになりかねない。古田の指摘を踏まえるならば、無理に身近なものとして古典を感じさせようとするのではなく、むしろ「他者」として眺めることで、現代の読み手として作品と向き合い、その価値を更新していくという方向性に可能性を見いだすことができる。「親しみ」という観点でも、ただ部分的な共通点があるという程度ではなく、読み手である生徒の内面に関わる形での「親しみ」を感じさせることができる可能性が高くなると考える。

以上のことから、古典と出会った生徒たちが現代の読み手の一人として、「他者」である古典と向き合い、自らの文脈でその価値を構築していくことができる活動を教室空間に用意する必要がある。そして、その活動は、古典世界を自分の日常の言語生活や文化と結び付けて考えることができるものであり、「授業で行う以上、何らかの価値があるものだ」という価値観を必要以上に助長することがないものであるという点に授業者としては留意しなければならない。

1-3 具体的な活動

これらを踏まえ、古典作品の世界を自分の現代の生活と接合させることができるような活動を授業の中に盛り込むこととした。具体的な活動として、古典の「日記文学」を取り上げ、その日記を現代でも用いられている日記の形式にリライトする活動を行うことを考えた。

アンケート調査の質問8の結果からは、生徒は日常的に日記をつける習慣がほとんどないことがわかる。一方で、SNSに日常のことを投稿するかどうかという質問9になると、投稿すると答える生徒の割合が多くなる。日々の記録を必ず残すというよりは、残したいことがあった日や気が向いたときに興味の赴くままに記録するようなものとして、生徒の近くに日記が存在していることが窺える。SNS上の日記は、宿題として課されるタイプの日記などのように強制力があるわけではない分、自分が残しておきたいと感じたから残すという、書く行為の意図や目的の点において、古典における日記文学と近いものであると考えられる。「日記」という枠組みを活用することで、各生徒が自分の日常生活を振り返りながらも、自然に古典作品の世界に浸ることができるはずである。

2 「帰京」のリライト実践

2-1 実践概要

以上のことを踏まえて、高校二年生（農業科37名、施設園芸科39名、食品科学科38名、生活科学科40名）を対象に、教材「帰京」（紀貫之『土佐日記』）のリライト実践を行った。

生徒たちは、1学期に「門出」を学習しており、『土佐日記』の筆者など、基本的な内容は理解している。特に「女性のふりをして書いている」ということは、古典に関する知識が乏しい生徒にとっても印象深く残っている。ただ、これまでに古典文法に関する知識はまったく身に付いておらず、辞書も所持していない。そのため、古文を自分で訳すことはできほとんどできない。一方、二学期に俵万智「古典の和歌を現代の言葉で書き換える」を取り上げた際には、わからないなりに積極的に古典の和歌を現代の言葉で書き換えようとしている姿も見られた。

「帰京」は、日記文学である。近所付き合いに関する言及のような身近なものから、子を失った大きな悲しみまで、筆者の感情がありありと書き記されている。思いの丈をかきつけながらも、最後に「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」という部分は、現代のSNSなどの日記においても珍しくない表現であると予測される。日常生活の様々な感情を書き記すという点から、現代の私たちからみても親近感を持ちながら読むことができる教材である。

今回の授業では、生徒が普段の生活の中で行っているような現代の「日記」の形にリライトする活動を行うことで、現代の自分の生活と古典作品を比較して考

える機会をつくり、古文を身近なものとして感じさせることとした。

「日記」という切り口から古典作品に触れることで、古文に苦手意識をもっている生徒であっても、現代の生活を送っている自らの作中の人物を引きつけながら読み深めることができる。また、現代の「日記」の形にリライトする活動を行うことで、古典世界と自らが生きる現代の繋がりを感じながら、自らの言語生活を振り返ることも可能である。リライトする活動の結果としてひとつの作品を作り上げることは、普段、農業の実習を通して成果物を生み出している生徒にとって、授業のモチベーションにもつながる。

また、今回は、テンプレートや方法をいくつか用意し、ある程度自分にあつた方法を選択できるようにした。生徒たちは、異なる生活実態をもっており、学力や学習意欲の面でも差があるため、自らの日常生活と古典作品の世界を接合するためには、自ら考えなければならない。そのため個人での活動がメインになるが、何もないところから自分一人で作品を作り出すことが難しい生徒が多いという現状を踏まえた手立てである。用意したのは、A 手書きの日記、B 絵日記、C インスタグラム風の3種類のテンプレート、D 自由創作である。

授業は全3時間で構成した。各授業の内容は以下のとおり。

表2. 各時間の授業内容

1時間目	『土佐日記』について知っていることを出し合う。その後、教師の解説を聞き、「帰京」の内容を知る。
2時間目	前時に習ったことをもとに、「帰京」を自分が親しみやすい現代の日記の形に書き換える。今回はA 手書きの日記、B 絵日記、C インスタグラム風の3種類のテンプレートを用意した。白紙を用いてそれ以外の形式で書いても構わないと指示した。
3時間目	机の上に自分の作品を置き、教室内を自由に歩き回り、他の人の作品を鑑賞する。自分と異なる表現方法を知ることで、作品に対する理解を深化させ、また自分の視野を広げさせたいと考えた。作品の種類によって鑑賞時間に差が出るため、グループワークなどではなく、自由に鑑賞する形をとった。最後に、自分で作品を作ったり、他の人の作品を見たりといった活動を通して考えたことをワークシートにまとめる。特に、自分の作品の中で意識した点、日記という表現について考えたことを書くように指示した。

2-2 制作した作品について

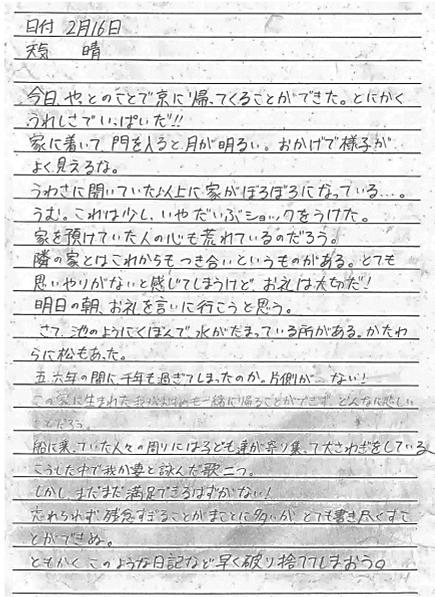
ここから、特徴的であると思われる作品を取り上げ、分析する。なお、作品そのものを見ただけでは、生徒の画力やもともと字の丁寧さといった部分の作品の出来栄によって、その制作意図を読み取ることが難しいため、ワークシートの記述と作品を照らし合わせて分析していくこととした。以下、3種類のテンプレートに分けて、分析する。なお、作品が見づらい部分があるため、作品と合わ

せて書いてあるテキストを打ち出したものを掲載する。改行は／、絵文字は（）内に文字で表している。

A 手書きの日記風

このテンプレートを選んだ理由としては、「文章量が多いほうが授業で習った現代語訳をそのまま生かすことができそう。」「絵が苦手だから。」という理由が多かった。そのため、生徒の作品の傾向としては、前時に学習した現代語訳をベースとし、わかりにくい表現を自分にとってなじみのある表現に変換しながら書いていくパターンがほとんどであった。

特徴的な作品では、文字の書き方や紙そのものの状態を工夫する動きが見られた(作品①)。例えば、日記を書いているときの感情に合わせて文字の大きさや濃淡を変えたり、紙を一度丸めてから開いたようにぐしゃぐしゃとしたり、部分的に破いてみたり、水や目薬を

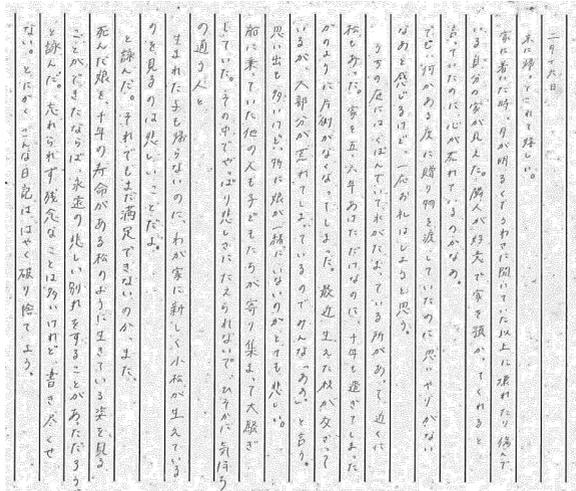


作品 1

日付 2月16日／天気 晴／今日、やつのことで京に帰ってくるのができた。とにかく／うれしさにいっぱいだ！！／家に着いて、門を入ると月が明るい。おかげで様子が／よく見えるな。／うわさに聞いていた以上に家がぼろぼろになっている…。／うむ。これは少し、いやだいぶショックをうけた。／家を預けていた人の心も荒れているのだろう。／隣の家とはこれからもつき合いというものがある。とても／思いやりがないと感じてしまうけど、お礼は大切だ！／明日の朝、お礼を言いに行こうと思う。／さて、池のようにくぼんで、水が溜まっている所がある。かたわ／らに松もあった。／五、六年の間に千年も過ぎてしまったのか。片側が…ない！／この家に生まれた我がむすめも一緒に帰ることができず、どんなに悲しい／ことだろう。／船に乗っていた人々の周りには子ども達が寄り集って大きわぎをしている。／こうした中で我が妻と詠んだ歌二つ。／しかし、まだまだ満足できるはずがない！／忘れられず、残念すぎる事がまことに多いがとても書き尽くす／とができぬ。／ともかくこのような日記など早く破り捨ててしまおう。

垂らし涙のあとを再現しようと試みたりするものもあった。

授業者としては横書きのノートの一ページをイメージしてテンプレートを用意したが、縦書きの作品もあった（作品②）。ワークシートの記述からは縦書きを選んだ理由について読み取ることができなかったが、「国語」という教科の特性や「古典」という文脈に近い形をとったと予想できる。



作品 2

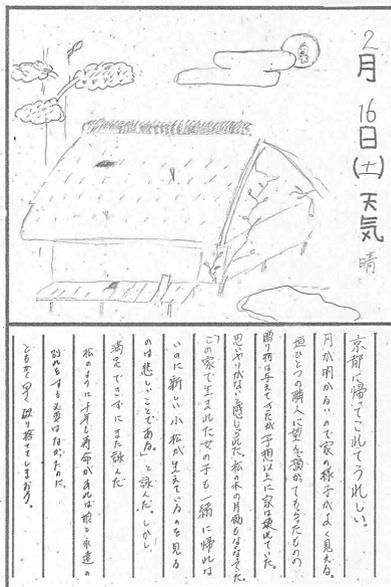
二月十六日／京に帰ってこれて嬉しい。／家に着いた時、月が明るくてうわさに聞いていた以上に壊れたり傷んで／いる自分の家が見えた。隣人が好意で家を預かってくれると／言っていたのに、心が荒れているのか。／でも、何かある度に贈り物を渡していたのに思いやりがない／なあと感じるけど、一応お礼はしようと思う。／うちの庭にはくぼんできて水がたまっている所があつて近くに／松もあつた。家を五、六年あけただけなのに、十年も過ぎてしまった／かのように片側がなくなつてしまった。最近生えた枝が交ざつて／いるが大部分が荒れてしまつていたのでみんな「ああ。」と言う。／思い出も多いけど、特に娘が一緒にいないのがとても悲しい。／船に乗っていた他の人も子どもたちが寄り集まつて大騒ぎ／していた。その中でやつぱり悲しさにたえられないで、ひそかに気持ち／の通う人と／生まれた子も帰らないのに、わが家に新しく小松が生えているのを見るのは悲しいことだよ。／と詠んだ。それでもまだ満足できないのか、また。／死んだ娘を、千年の寿命がある松のように生きている姿を見る／ことができたならば、永遠の悲しい別れをすることがあつただろうか。／と詠んだ。忘れられず残念なことは多いけれど、書き尽くせない。とにかくこんな日記は、はやく破り捨てよう。

B 絵日記風

このテンプレートを選んだ理由としては、「文章を書く量が少なくてよいから。」「小学校の夏休みの宿題を思い出して懐かしい。」という理由で選ぶ生徒が多かった。実際に活動を始めてから、情景描写を細部まで深く読み直さなければ絵として表現することができないことに気づき、本文に立ち返る様子が見られた。例えば、月を満月で描いた生徒と三日月で描いた生徒がおり、自分たちの絵を見比べながら、本文を読み返し、話し合う様子が見られた。

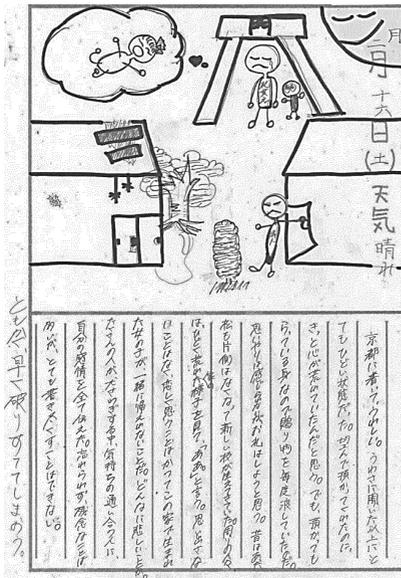
全体の作品の傾向としては、上部の絵を描く部分にぼろぼろになった家の様子を描き、下部の文章の部分には話の全体の流れを端的にまとめるタイプのものが多かった。また、空や月に亡くなった娘の絵を描く生徒も多かった（作品③）。現実には起きていないことを表現することができることは、絵日記の特性の一つであると言えよう。

鑑賞の中で他のクラスメイトの注目を集めていたのは、「早く破り捨ててしまおう」を枠外に書いた作品（作品④）やひたすらに娘の死に関する悲しみを表現した作品（作品⑤）である。作品④は、最後の一文をあえて欄外に少し大きな字で書くことによって筆者の投げやりな気持ちがよくわかるという評価であった。作品⑤は、娘を失った悲しみが前面に押し出されており、絵日記の作品の中では異色の作品である点で注目を集めていた。どちらも制作者が意図して工夫した部



作品 3

分であることをワークシートから読み取ることができ、それが鑑賞者にも伝わった結果である。



作品 4



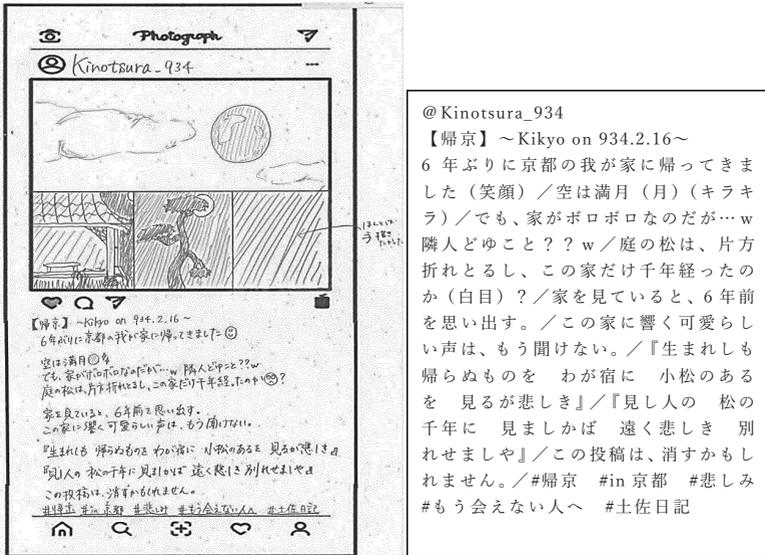
作品 5

C インスタグラム風

このテンプレートは、普段から SNS を利用しており、元から SNS 上の自己表現を好む生徒が選ぶ傾向が強かった。授業者の予想に反してこのテンプレートを選択する生徒が極端に少ないクラスもあった。普段から SNS の利用について、情報モラル的な厳しい指導を受けている生徒にとって、古典の授業の活動として制作イメージをもつことがかなり難しかったようである。その結果、初めは「面白そうだけど、難しそう」「どう書いていいかわからない」と敬遠していた生徒の中には、ほかのクラスメイトが書き始めたのを見て途中からこのテンプレートを使用することにした者もいた。

作品の傾向としては、ちょうどインスタグラムのアップデートにより投稿ページの仕様が変わったタイミングであったため、その話で盛り上がり、アカウント名や ID、コメント数、DM の通知数、「…続きを読む」という表示など、SNS の仕様上の細部へのこだわりを見せ、リアリティを追求する姿が見られた。ハッシュタグを用い、文章を多く書かないという SNS 上の特性を生かした作品が多い。そのため、本文のどこかのシーンを切り取って作品にするものが多かった。

作品⑥は、ストーリーの全体を SNS 並みの文章量の中で上手にまとめてあり、わかりやすいという評価が多かった。最後の「この投稿は消すかもしれません」という一文もリアリティがあると人気であった。作品⑦のようなポップな作品も



作品 6

多かった。これは「インスタグラムという SNS に投稿をする女性像」を追求している姿であると解釈できる。作品⑦の製作者は、ワークシートに「内容が悲しい内容なのに、ポップなみためになってしまい、「とても悲しい」という内容が伝わりにくかったのもっと楽しい内容の時に書いてみたいと思いました。」と記述している。SNS には楽しいことを残したいという思いや、インスタグラムという SNS にはある程度おしゃれで人生を楽しんでいる様子を投稿すべきであるというイメージなどといった日常の言語生活の実態が表れている。



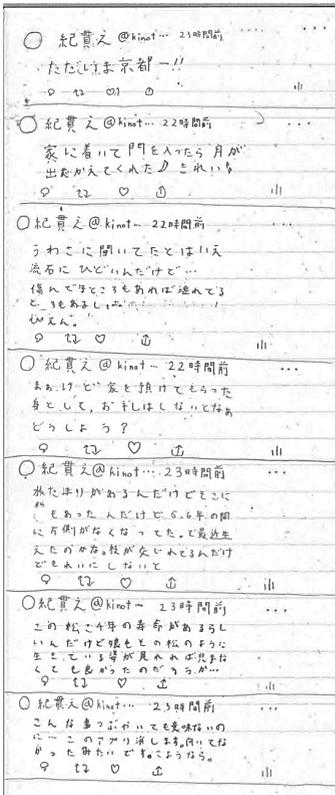
@kinochanshikakatan__
 やつと京都これた〜(笑顔)(ハート)
 京都は本当いい。京都しか勝たん(ハート)
 /ひさびさの家からはきれいな月が(月)(星) /でも残念なことに、大事にしてた家壊れてて超病んだ(涙)
 /隣の人が望んで預かってくれてたのにこれは心も荒てそう(泣)(汗) /ちゃんと贈り物送ったのに!!! (怒)(びえん)(びえん)(びえん)(びえん)(びえん) /でも私良い子だからお礼はするの。ピンモンにしようかな〜(ハート)(ハート) /その時「全然大丈夫」とか言ったらさすがにストーリー撮っちゃうから(びえん) /#近所トラブル #仕事帰りの愚痴 #OLのつぶやき #絵文字 /#近所トラブルに困っている人と繋がりたい #人生びえん /#さすがに自分やさしすぎ #GUCHI #私の松の木どこ? /#句わせ #月にラクガキ

作品 7

D 自由創作 (Twitter 風)

用意したテンプレートを使用せずに、1 から作品を作った生徒もいた。「自分が1 番利用している SNS だから。」という理由で Twitter 風にした生徒である。複数のツイートを連続して繋げることによって、本文のストーリー性を表しやすかったようである (作品⑧)。インスタグラム風のものよりも、本文のストーリーの流れをそのまま生かすことと現代の SNS 文化を取り入れることのバランスがちょうどよく、鑑賞の際にも人気があった。

また、同じ Twitter 風の作品でも、アカウントのホーム画面を中心とした作品もあった (作品⑨)。紀貫之だけでなく、フォロワーとして周辺の人物を登場



- 紀貫之@kinot…23時間前
ただいま京都ー!!
- 紀貫之@kinot…22時間前
家に着いて門を入ったら月が／出むかえてくれた(月)きれい(キラキラ)
- 紀貫之@kinot…22時間前
うわさに聞いてたとはいえ／流石にひどいんだけど…／傷んでるところもあれば壊れてる／ところもあるし。／びえん。
- 紀貫之@kinot…22時間前
まあけど家を預けてもらった／身として、お礼はしないとなあ／どうしよう？
- 紀貫之@kinot…23時間前
水たまりがあるんだけどそこに／松もあつたんだけど5、6年の間／に片側がなくなつた。で最近生／えたのかな。枝が交じれてるんだけ／どきれいにしないと
- 紀貫之@kinot…23時間前
この松さ千年の寿命があるらし／いんだけ娘もその松のように／生きている姿が見れば悲まな／くても良かったのだろうか…
- 紀貫之@kinot…23時間前
こんな事つぶやいても意味ないの／に…このアプリ消します。向いてな／かったみたいです。さようなら。

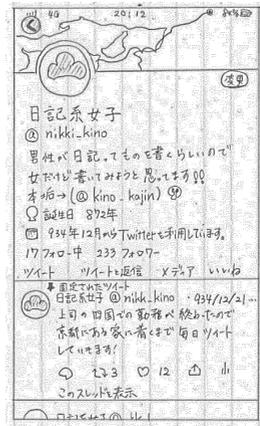
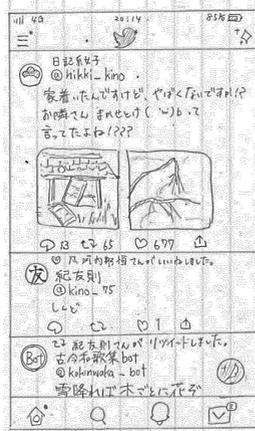
作品 8

させることによって、リアリティを追求している。かなり具体的に SNS を利用する姿をイメージしなければ思い至らない発想であろう。

2-3 考察—現代の日記の形式にリライトする活動の有効性

今回の活動は、古典と出会った生徒たちが現代の読み手の一人として、古典と向き合い、自らの文脈でその価値を構築できる活動であったのだろうか。

活動中の全体的な様子としては、普段、古典というジャンルだけですでに抵抗感を示すような生徒であっても、リライトをする中で本文や前時に示した現代語訳を読み直す姿が見られた。完成した作品も併せてみると、絵として表現しなければならないという場面に立った時、何を読み取らなければならないのかということを感じ、自ら本文を読み直す姿が見られた。SNS の投稿として



○日記系女子
@nikki_kino

家着いたんですけど、やばくないですか！？／お隣さんまかせとけ(・ω・)b って／言ってたよね！？？？【家の写真】
返信 13 RT65 いいね 677

・凡河内躬恒さんがいいねしました。

○紀友則
@kino_75
しんど

返信 0 RT0 いいね 1

・紀友則さんがリツイートしました。

○古今和歌集 bot
@kokinwaka_bot
雪降れば木ごとに花ぞ

日記系女子
@nikki_kino

男性が日記ってものを書くらしいので／女だけど書いてみようと思ってます！！／本垢→(@kino_kajin) (内緒)
・誕生日 872年
・934年12月からTwitterを利用して17フォロー中 233フォロワー

・固定されたツイート
日記系女子 @nikki_kino 934/12/21...
上司の四国での勤務が終わったので／京都にある家に着くまで毎日ツイートしていきます！
返信 0 RT3 いいね 12

作品 9

本文を切り取らなければならないという立場に立った時、どこが一番重要なシーンであるのかを考えながら読み返す姿が見られた。手書きの日記であっても、登場人物の心情に寄り添う形で読み取りを行うことが容易になっていた。例えば、「読むときより日記として書いている時の方が悲しくなり、「帰京」は初めから悲しい気持ちで話が始まり、最後はより悲しくなったなと思いました。こんなに悲しいことがあったら今後どうやって生活したかなど続きが知りたいと思いました。」という感想があった。ただ読むだけでは遠い世界の登場人物の話でしか

かったものが日記という形でリライトすることによって自分のもののように考えることが容易になり、さらに作品の続きを読みたいという興味が広がっている。これまでの現代語訳をなんとなく暗記するだけの古典の授業では、まったく見られなかった姿である。

このように、現代の「日記」という枠組みを利用してリライトする活動を行うことで、自分の得意なフィールドに古典作品を持ち込むことが可能となった。その結果、自らの得意な言語生活環境を振り返りながら古典作品を眺め直し、自らの文脈で作品と向き合うことができたと言えよう。

しかし、その価値を構築していくところまで迫ることができたかどうかを判断することができていない。それぞれの生徒が現代の読み手の一人として作品と向き合った結果、それがどの程度達成されているかということを授業者が評価することが難しい。まず、それぞれの生徒がその古典作品の世界をどれほど踏まえたかということを見取ることができなかった。完成した作品を見ると、紀貫之として書いたものと『土佐日記』と同じように女性に仮託して書いたものの両方が見られた。紀貫之として書いた生徒の中でも、振り返りシートに「自分にとって現代の紙の日記は自分のためだけにつけるものという印象が強く、自分の気持ちを素直に書くことを大切にしたいという思いから紀貫之として書いた。」というように自分なりの理由を述べているものもあれば、単純に「原作の設定を忘れていたので気を付けたいです。」というものもあった。今回の授業では、とにかく自分なりに自分の言語生活と古典世界を結び付け向き合うというところを目指していたため、完成した作品にこのような違いが生まれたことは大きな問題ではないかもしれない。しかし、授業者としては、作品を作る過程で『土佐日記』という作品そのものや『土佐日記』の表現について検討されたかという部分は見取ることができるようにしておく必要があるだろう。また、生徒の作品からは『土佐日記』の「帰京」の内容の理解度を測ることも難しい。例えば、月の描写についてである。本文には月が明るいので家の様子がよくわかると書かれている。雲もなく、満月が輝いている様子を読み取ることができる。しかし、作品①の制作者のワークシートに次のような記述がある。「絵日記を書いてみてより内容描写を理解しないと書けないのでとても理解できた気がします。天気や日付ひとつでも情報を採り出すのが楽しかったです。絵の中に月の表し方、僕は満月を書きましたが、太陽と区別しづらいと思ったので雲を重ねて工夫しました。帰郷ということで曜日も週末にしてみました。文から読み取れる描写とは別にボロい家に工夫(板をこわしたり、壁につたをはわせたり、屋根は藁にしてみたり)できて楽しかったです。」この感想では、本文から情景を読み取りつつも、絵として表現した際に「太陽」ではなく「月」であるとわかりやすくするために「雲」を描写することにしていることがわかる。「絵」や「SNS」といったフィルターを通すことによ

て、生徒の身近なものとして存在させる反面、複雑な思惑によって表現され表出される。この作品作りはあくまで生徒自身が本文を理解するための過程であり、方略のひとつであるということに留意しなければならない。その上で、どのように評価をしていくべきか検討していく必要がある。

3 まとめ

古典の「日記文学」を現代の日記の形式にリライトするという活動は、自分の得意なフィールドに古典作品を持ち込むことが可能となり、自らの得意な言語生活環境を振り返りながら古典作品を眺め直し、自らの文脈で作品と向き合うことができるという点で有効であった。このように、古典を生徒のほうへ近づけて考えさせることができた一方で、それぞれの生徒が古典世界にどの程度まで検討することができたか、どのように価値づけることができたかといった点を見取る方法については、検討が必要である。また、生徒の感想の中では、「インスタや絵日記など日記が違うだけで、内容が違う感じがする」というメディアそのものの特性によって、同じ内容であっても伝わり方が異なることについての気づきを感想に書いている生徒もいた。誰もが情報機器を持ち、手軽に表現者や情報の発信者となることのできるこの現代社会において、このような視点は非常に重要である。完成した作品を分析する中で、自らの言語生活を振り返り、普段の自己表現について考える機会としても有効性がありそうである。古典と現代文という枠組みに捉われない授業の形のひとつとしての可能性も示唆されたのではないだろうか。

【脚注】

- (1) 井浪真吾『古典教育と古典文学研究を架橋する 国語科教員の古文教材化の手順』文学通信 2020年 p. 168
- (2) 前掲書 p. 184
- (3) 古田尚行『国語の授業の作り方 はじめての授業マニュアル』文学通信 2018年 p. 175

(みやざわ・ひろえ 愛知県立渥美農業高等学校 本学大学院 2019年修了)